

福井県医師会

だより

第703号 令和2年(2020)1月

新春特集号



智馬本生 [キジル第14石窟]

福井市 吉村 信

表紙写真説明：智馬本生 [キジル第14石窟]

福井市 吉村 信

日本から4,500kmの西域、クチャ（庫車）にある、「シルクロードに咲いた大輪の花」の称されるキジル石窟の壁画の模写である。「智馬本生」とは、釈迦の前世が馬であった時、戦いで傷ついた主人の王を、自らも傷つきながら主人の城まで運び届けた後死んだという、私欲の無い自己犠牲の精神を讃歌した物語である。蓮華池に蠢く不思議な人物・白犬達は、煩惱を捨て切れぬ哀れな我々、衆生を示唆しているのであろうか。自己主張、自己責任の妄語・謗言が飛び交う社会現象への一服の清涼剤として鑑賞して頂けたらと思う。中国北京の中央美術学院（日本の芸大に相当）、胡明哲教授より提供を頂いたが、小生も見た原画（6～7世紀）より優しい表現が印象的で、換骨奪胎の感がある。

新年のご挨拶

福井県医師会長 池 端 幸 彦

新年明けましておめでとうございます。

福井県医師会会員各位におかれましては、令和になり初めての新年を健やかにお迎えのことと心よりお慶び申し上げます。また旧年中は県医師会事業等に何かとご支援ご協力を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

昨年は、集中豪雨や台風等により全国規模で数々の被害が多発した厳しい一年でもありました。ここに改めて被災した方々に心よりお見舞い申し上げますと共に、一日も早い復興を遂げられますよう心よりご祈念申し上げます。

さて私は昨年6月に新しく県医師会会長に就任して以来はや半年が過ぎ、県医師会の代議員や理事の各先生はもとより、会員の先生方や事務局の皆様方の絶大なるご支援のもと、お陰様で何とかここまで無事会務を遂行して参りました。

しかしご承知の通り我が国における医療を取り巻く環境は、人生100年時代における「全世代型社会保障検討会議」が設置されるも、その構成員は経済学者中心で構成され、何と横倉義武日本医師会会長をはじめとする医療関係者代表が全く入っていないという危機的状況にあり、本年4月からの診療報酬改定においてもかなり厳しいものになる可能性が示唆されております。

一方でまた地域医療を担う私達にとっても喫緊の課題である地域医療構想においては、公立公的病院を中心に全国で424病院が再検証対象病院として突然実名公表された事はまだ記憶に新しいかと思います。これはあくまでも「急性期機能」という一点についてのみの評価に基づいたものであり、当然ながら決してそれらがすべて地域に必要とされていない統廃合の対象病院であるという事ではありません。しかし逆に

言うと、決してその対象病院以外はすべて現状維持で構わないという免罪符を与えられているわけでもないのです。

そしてまた、待ったなしの少子高齢化に伴う地方の人口減や患者減少と介護の担い手不足、更に医師偏在対策や働き方改革への対応も絡み、この改革の荒波が民間病院や一般診療所にも押し寄せてくることは必至と考えねばなりません。正に本年を含めてここ数年が、我々医療界にとっても正念場かと思います。またどの案件も、ともすると公的公立医療機関 vs. 民間医療機関、大規模病院 vs. 中小病院、病院 vs. 診療所等の対立軸をあおるかの様な施策が打ち出されようとしています。しかしこのような厳しい時代だからこそ、私達医師会がその中心に立って、昨年日本で開催されたラグビー W 杯ですっかり市民権を得た「ワンチーム」として、国民の医療を守ると言う本来の目的のもと皆が一致団結し、この苦難を乗り越えなければならないのではないのでしょうか。

私は就任時のキャッチフレーズを『Act Now for the Future ～未来のための今～』とし、「県民そして会員のための県医師会へのチェンジ」の基本方針のもと、①組織の効率化・活性化、②郡市区医師会との連携強化、③県及び県内医療関連団体・組織等との連携強化、④災害対策本部設置と機能強化、⑤広報活動・医政活動の充実の5つの柱を立てましたが、現状ではまだまだ志半ばであります。新年を迎えるに当たり、あらためて県医師会役員一同はもとより、各郡市区医師会、更には県医師信用組合、県医師協同組合、県医師国保組合等の会館内関連団体とも一致協力のもと、少しでも県民のため会員のための県医師会活動に邁進してまいりたいと思

